

私は、ほんもののコーチになりたいと思いつけてここまでやってきた。これまで述べてきた事は、そんな私がどのような壁にぶつかったか、また、どうしてその壁を破る抜け道を見つけたのか、どうやって日本一の座をつかんだのかというようなナマの体験談である。コーチ生活三〇年、さまざまな体験を重ねながら私が描くほんもののコーチ像も少しずつ変わってきた。ここでは、私が描くほんもののコーチ像がどう変わってきたか、また、今描いているほんもののコーチ像とはどんなものを述べ、本編の締めくくりとしたい。

勝利へのあくなき追及心を失わないコーチ、それがほんもののコーチの絶対不可欠な条件だという考えは今も昔も変わってはいない。その基本理念に立ち、私はさまざまな挑戦をし続けてきた。最初の挑戦は知識の修得だった。日本一のチームを創りたいのなら、指導者である私がいま日本一にならなければならぬ。私は、日本にあるバスケットボールの専門書はすべて読み、バスケットボール関係者をして「バスケットボールの専門的知識なら山崎が日本一だろう」と言わしめるようになるうとした。

が、知識が豊富になっただけではチームは強くならなかった。知識を教える技術が貧弱だったからである。生かじりの知識を矢継ぎ早に選手にぶつける。追い立てられる選手はパニックに陥る。そんなやり方で何度もチームをバラバラにしてしまった。それに気がついた私は、バスケットボールを書物から学ではなく選手の練習を観察する中から学ぶ方法に切り換えた。「あの選手はできるのにこの選手はなぜできないのだろう。どこが違うのだろう」と考えて選手の行動を観察する。そして違いを発見し、それを選手に返すのである。書物から得た知識は基礎知識としては重要だが、それをそのまま選手に教えるのは選手の個性に合っていない場合もある。だから、この方法は選手の立場にたった有効なコーチングの方法だと私は今でも思っている。

しかし、それだけではうまくいかない。知識がある事も、現象を見抜く確かな目を持っている事も、知識を教える技術を持っている事も、それはコートの上では役に立つ。が、選手はコート外でもさまざまな不安と戦いながら生活しているし、そのような不安をなくしてやらなければチームは強くないのである。私は選手の不安を解消する手助けをしてやるのもコーチの重要な仕事のひとつだと考えているんな手をつくした。

例えば、中学生の段階では勉強との両立という大きな不安と戦いながら部活動をする選手、そしてその事に心を悩ます家族が多い。そこで私は、そんな不安を抱えて部活動をしている選手の家庭教師をするために英語や社会学や理科などの主要五教科といわれる教科の勉強をもう一度やりなおした。また、選手や保護者はスポーツにはつきもののケガの事をいつも心配する。ケガの事になると医師から説明を受けてもわかりにくい事が多いので疑心暗鬼にかられる。だから私は、難しい医学的な用語を使わなくてもわかりやすく説明できるよう、スポーツ医学を勉強した。

が、それでも指導者として納得のいく自己評価はできない。わかってしまってもない事であるが、それは当然の帰納だった。なにしろ私は「私はこんなに勉強したのに……」「私はこんなに選手思いなのに……」という思いが優先して、問題が起きたり成果が上がらなかつたりすると「なにに選手は……」と、その矛先を選手に向けていたのだから。その事に気がついたのは四〇才を過ぎてからだ。それからの私は、何を教えるにも選手の側から物事を見、選手の立場に立った「おもいやり」を心掛けて選手に接する努力をしている。

では、勝利へのあくなき追及心、専門知識の豊富さ、指導技術の巧みさ、鋭い観察眼、面倒見のよさ、おもいやり、が揃えば一人前のコーチと言えるかというと、まだ釈然としないものがある。もちろん、

私自身がこれらの条件を充分に満たしていないからでもあるが、自分のコーチぶりを振り返ってみると、私には人間の本質の理解度が不足していたのではないかと今感じている。

実は、私のノートに『人間』ということばが出てくるのは昭和五二年である。そのノートに私は「人間」というのは実に愚かな生き物である。それを知ることが大切だ」と書いている。私はこの時点で人間というものについて充分理解しているつもりでいた。ここで私が選手に説いたのは、「人間という生き物は優れた知能を持っているから物事をよく理解できる。しかし、理解できたことを実行する生き物かというところではない。わかつてはいるけどやらなくて怠ける事が多い生き物である。それが人間の本質なのだ」という事である。だから私は何をしようとしたかというところ、わかつてはいるけどやらないう行動の原因になっている邪悪な心を徹底的に選手の心の中から抹殺しようとしてみた。私が、「人間の本質を理解していなかった」というのはその事である。

人間は崖っぷちに立たされると本性が出る。未練、妬み、あきらめ、投げやり、そんなものが、勝負の崖っぷち、私生活の崖っぷち、職務上の崖っぷちに立たされる度に、内面から沸き上がってくるのである。私は選手のそれとは比較にならないほどの修羅場を潜ってきているからとくにそんな邪悪な心は征服しているはずなのに今でもそんな事が度々ある。そんな自分を見ていると、自分の半分も人生を生きてきていない選手の心の中に住み着いている邪悪な心がそう簡単になくなるはずがないし、ほんの少しだけ邪悪な心に負けそうになった選手を蛇蝎のごとく嫌いのしるのはとんでもない間違いだと思つのである。

五三才。コーチをやれる年数も少なくなってきたが、やればやるほどコーチの難しさを感じる。そして、やればやるほどほんもののコーチまでのゴールテープがどんどん遠ざかっていくような気がする。しかし、「俺だつてまだ自分の愚かさを克服できないでもがいている一人の人間なんだ」という目でもう一度選手の一挙一動を見直し、選手に納得のいくアドバイスがしてやれるコーチになる努力をし続けていきたいと思つている。

さて、いよいよ最後になった。私はこの欄を借りてお二人の方にお礼を言わなければならない。

この改定版は自費出版である。平成四年に『続・チームを創る』が発刊された時、第四刷で絶版になった初版の『チームを創る』が欲しいという声を多数耳にしたので私はこの改定版を書いた。しかし、初版のように商業出版で出すのはなかなか難しい。私は自費出版でもいいからこの本を欲しがっている人に少しでも早く届けてやりたいと思ひ始めた。その話を聞きつけて行動を起こしてくれたのが鹿児島工専バスケットボール部監督の鮫島俊秀先生である。

彼は出版関係の仕事をしている今村事務所の今村太多志氏を私に紹介してくれた。鮫島先生と今村氏は師弟関係であるらしく、ぴったりと息が合う。あとはこのお二人でどんどん仕事が進んだ。

この本は一〇〇〇部の限定出版であるが、六〇〇〇部出版された初版よりも私は幸せだと思つている。なぜなら、この改定版の出版に対するお二人の熱意は、著者である私の意気込みをはるかに越えているからである。この本の出版に対するお二人の情熱と努力に、改めて謝意を表す。

平成八年二月

著者